

と初めて知りました。住居、農水産、加工、漁業、瓦礫、すべて汚染の対象となり、汚染対策が軌道に乗らなければ前に進むことが出来ません。

慰霊祭出席者

敬称略

新潟県 須藤明子 宮城県 安藤としえ
坂田とみえ 福島県 富田キミ 栃木県
菊池彦巨 猪瀬康夫 岡村勝利 大串直
行 大串千代子 埼玉県 西勝章夫 鈴
木裕子 大井和子 小松順子 小田原利
子 藤田羊一 佐藤知子 真鍋信一 真
鍋公代 高林芳夫 千葉県 泉水堯恵
泉水晃子 石井健蔵 東京都 中村順子
中村秀夫 山田二美 笹幸恵 石川勲
星野綾子 谷梯初江 石川享子 浜田つ
き子 若狭幸子 若狭健一 若狭恵子
若狭英子 杉浦喜久子 間々田征史
間々田邦子 間々田裕子 石田文子 山
田摩希子 黒川誠 晝間志津子 内海淑
子 山口良二 草場寛 神奈川県 小田
原豊 小田原靖 佐藤隆一 佐藤章子
佐藤加久也 石澤洋子 安威和子 糀谷

友孝 鈴木友季子 鈴木進 平井貢
新潟県 山田昭雄 愛知県 浜田芳枝
目黒知子 目黒一誠 岐阜県 堀尾洋平
吉田正明 山口県 吉永光 吉永早良
櫛崎馨 吉永峯生 吉永満知恵 香川県
石川正興 石川妙子 松原敦子 金森佳
子 福岡県 平田郁子 石松順子 沖縄
県 宮城勇

慰霊祭

定刻までに参集殿に皆さんが揃ったところで、高林幹事から本日の行事説明があり、続いて神官の誘導で手水を遣い、拜殿で清祓を受けて昇殿します。

神官祝詞奏上の後、黒川会長による祭文奏上に続いて、会長、安藤としえ、岡村勝利、鈴木友季子、山田昭雄、金森佳子、吉永峯男、宮城勇さんが玉串奉奠を行いました。一礼二拍手一礼の作法に則り、一同合わせて拝礼をしてお神酒を戴いてご本殿を退下しました。

靖国会館前での記念写真撮影は雨の予想で危ぶまれましたが、12ページの写真のように無事撮影に間に合いました。

総会

靖国会館2階「田安の間」で正午より総会を行いました。高林幹事の司会、山口幹事の議長で始まり、式次第に従って議事が進行しました。

式次第

開会の辞

会長挨拶

会計報告

会計監査報告（内海淑子監査役）

国内慰霊祭行事の発表

現地慰霊巡拝の説明と発表

その他

黒川会長からは本会のホームページ開設に伴う原稿の募集と閲覧をお願いする旨の挨拶と平成23年度会計報告（別紙参照）があり、内海淑子監査役から3月11日の役員会にて総勘定元帳と収支資料を照合した結果、間違いのなかったことが報告され、出席者全員の承認を得ました。

国内慰霊祭行事は黒川会長より、5月28日には千鳥ヶ淵墓苑拜礼式、7月15日の本会永代神楽祭（命日祭）が午後2時



④総会スナッフ⑤宮城さんの挨拶と乾杯音頭

④黒川会長挨拶⑤総会スナッフ

より斎行されるので是非ご参加下さいとの呼びかけがありました。

例年の通り8月15日には全国戦没者追悼式と東京都戦没者追悼式、10月には沖縄戦没者追悼式が挙行されることが発表されました。

現地慰霊巡拝の発表は高林幹事より、今年は11月に実施を予定しており、現在16名の参加者の正式申請中であることが発表されました。

最後にホームページの実際をプロジェクトで映し出しながら、その仕上がりが説明されました。

直会

総会後、同室において直会が行われました。会長挨拶に始まり、宮城勇（沖繩）さんによる乾杯の音頭で和やかに始まりました。

途中、星野綾子さんから今日の昇殿参拝を詠んだ俳句の披露、櫛崎馨さんの活動報告、安藤としえさんからは震災時の被害の模様と近況報告があり、午後3時に無事お開きとなりました。

平成24年度

政府慰霊巡拝

参加申し込みについて

この慰霊巡拝は国が実施し、参加者の推薦について国が都道府県に依頼しているものです。各都道府県が申し込みを受け付け、参加基準を満たしている方を国に推薦します。国は、推薦者の中から選考を行い、慰霊巡拝参加者を決定します。なお、参加者の旅費のうち概ね三分の一を国が補助します。

本文書は、「東京都」のものですが、マーシャル方面遺族会の会員が希望する場合は、本会本部に申し込んで戴ければ必要書類を直接申込者にお送りする手はずを整えております。都民である場合、申請書は都より受けます。

本会への申込期日 9月末日
以下、必要事項を抜粋してご説明致します。

参加基準

① 遺族の範囲

慰霊巡拝を行う戦域（マーシャル・ギルバード諸島）における戦没者の遺族（配

偶者（再婚者は除く）、父母、子、兄弟姉妹）であること。なお、応募人数が募集人数を下回った場合、参加する子・兄弟姉妹の配偶者、孫、姪、甥の参加が認められません。ただし、旅費の補助はありません。

② 遺族代表の条件

◇健康状態が良好であること。

◇初参加者を優先的に参加して戴くために同一地域における厚生労働省主催の慰霊巡拝に過去参加した遺族については基本的に5年以内（平成19年度以降）参加している者の推薦は行いません。

◇年齢は81歳以下であること。

③ 提出書類

◇参加遺族代表者内申書。介助が必要な場合は安全上お断りする場合があります。

◇戦没者の除籍謄本等。死亡場所が確認できる公的書類、及び参加希望者と戦没者との関係が明らかになる公的書類。

◇医師の証明書（参加内定者のみ）。

④ 参加者の決定

◇最終的な参加決定は、医師の証明書等により判断したうえで決定します。

◇予定参加人員を超える申請者があった

場合には、参加基準を満たす者であつても参加をお断りすることがあります。

◇参加申し込み遺族が少数である場合、

中止することがあります。

④ 実施期間

◇平成25年3月2日～3月10日

感激の慰霊の旅 そして近況報告

平成17年の慰霊の旅に参加して

鈴木友季子（神奈川県）

平成17年は終戦から60年目という節目の年で、私は4年目にして再び訪れることが出来ました。

この事は一重に父の導きと感謝しております。昭和10年生まれの私は70歳になっておりました。そしてその折は主人と共に旅が出来ました！

この年は司令官が女性で、容姿端麗な方で丁重にお出迎え下さり、慰霊碑の前では一人一人に握手して下さいました。記念のメダルを手渡され、涙なみだで心やさしい司令官に感激致しました。

また、高林さま、井上さまのご指導で「あの椰子の島」の歌を大木の下で教え

て戴き、全員で歌ったこと、和やかなひとときでした。

さらにグレッグ・ドボルザークさんにお会いして、現地では私達と共に行動されクエゼリンで玉砕した方を知りたいということ、父が最後に送ってくれた写真（昭和18年4月20日・ヤルートの検印）をお見せして60年目にして心ある方に見て戴いたこと、聞いて戴いたことに感謝感激でございました。

お一人お一人と交流が出来まして厳粛の中にも和やかな雰囲気です。慰霊の旅が出来たことに役員様はじめ皆様様に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

これからマージナル方面遺族会の一員として、どうぞよろしくお導きの程、お願い申し上げます。



ヤルト島での慰霊祭に臨む筆者

マーシャル諸島慰霊の旅

米林義昭
(東京都)

平成24年2月4日靖国神社に集合して
拝礼の後、バスにて成田発グアム経由で
最初の目的地であるクエゼリンへ到着し
ました。

此の地は私が2歳の時、母と姉（4歳）

の3人で巡洋艦「香取」で日本への帰国
の途についた想い出の場所でもありま
す。昭和19年1月30日、父に見送られて
出発・・・これが父との最後の日となっ
てしまいました。

父は南洋貿易株式会社ヤルト勤務の
ため現地に残り、第62警備隊として昭和
19年8月9日戦死しました。

記憶も想い出も残っておりませんが、
私の中では南洋のこの空気がなつかしさ
を呼び戻してくれました。

クエゼリン島、ルオット島、ミレ島で
の慰霊祭、そして私の生まれた地であり、
父の最後の地となったヤルト島での慰
霊祭が始まりました。

「お父さん！」70年間憧れたこの言葉
を思いっきり叫びました。慰霊文が涙で
かすみ声が出ません。

住んでいた社宅の土台や会社の倉庫跡
等も戦後67年が経過した現在もしつかり
残っている現実を目のあたりにした時は
言葉になりませんでした。

雨天のためにあの素晴らしい青い海と
青い空を見ることが出来なかったのが心
残りでした。2年間の短い月日でしたが、

父と暮らしたヤルト島でご供養出来た
ことが父に対しての最初で最後の親孝行
になったと嬉しく思います。

翌日はマジユロで全戦没者追悼式があ
り、大使館の方々も参列して下さり、盛
大な慰霊祭が行われました。

戦争のためマーシャルの各島々で貴い
命を散らした方々に対して哀悼の意を捧
げた旅でした。

近況報告

65歳で仕事を退職し、現在はシルバー
人材センターの仕事（図書関係）を週に
3日ほどしながら、旅行や趣味と残りの
人生を楽しんで生きております。シルバ
ー人材センターに入会したことで地域の
方々とふれあい、地元でたくさんの友人
も出来、小学生が下校時には地域のパト
ロールをボランティアでしたりと、少し
だけ地元に貢献しています。

姉は57歳で亡くなりましたが、母は95
歳で車椅子ながらも元気で過ごしており
ます。

母は、新婚時代を過ごしたヤルト島
での事は楽しそうによく話しますが、最
後の引揚げ船「香取」と共に思い出の品

はもちろん、全ての荷物は船と共にトラツク島の沖に沈み、何も持ち帰ることが出来なかったと悔しそうに話します。

島から島へ逃げまどいながら3カ月の月日をかけて、やっと日本に帰り着いたと聞かされていますが、道中、父の同僚である南洋貿易の方々から衣類や靴を調達してもらい、助けて戴いたことは今も感謝しています。

もっと早くに慰霊団のことを知っていたら、母もなつかしいヤルト島に連れて行って一緒に父の供養が出来たであろうと残念に思い、後悔しております。

現地追悼のデータ

遺児・米林義昭（昭和16年5月12日生まれ）続柄・長男

戦没者・米林義次（海軍軍属・第62警備隊）本籍・石川県

戦没地・昭和19年8月9日マーシャル諸島ヤルト島にて戦死）

父の形見の日記 読みながら涙す！

佐藤 勉

（宮城県）

父、佐藤富五郎は、大正15年1月1日

に現役兵として横須賀海兵団に入団、昭和3年満期除隊。昭和17年に再び召集。昭和18年4月28日マーシャル諸島ウオツゼ島に上陸した。

ほぼ2年後、同島で終戦4カ月前の昭和20年4月26日午前4時、40歳で没する。最終階級は海軍一等兵曹。

戦没時の家族は、母34歳、長女10歳、次女8歳、長男・勉4歳、三女1歳の五人家族であった。昭和19年5月15日、東京都豊島区椎名町より父の生まれ故郷、宮城県亶理町に疎開して終戦を迎えた。

激しい戦闘の最中であって死と対峙しながら、その当日までを克明に記して残した父の遺書が書かれた手帳と日記のあるノートは、戦後1年以上経った昭和21年12月頃、戦友だった山梨県原田さんから送られて来た。

親戚の叔母さんが読み聞かせてくれ、5歳5カ月の私だったが、号泣し、父は死んだんだなと思ひ知らされた。

平成8年1月、念願かなって地元で遺族会の人たちと沖繩の摩文仁の丘にある慰霊碑を参拝、英霊に追悼を捧げることが出来ました。終戦から満50年が過ぎ、

亡き父に再会出来た感激と悲しみに、心がひしがれました。それぞれの方々が持参した果物、おコメ、水、お酒、花などが捧げられました。私も戦友が大切に送ってくれた日記を捧げました。

父よ間違ひなく届きましたよ、繰り返し読みましたよ、と合掌しながら報告しました。責任を果たし、安堵しました。

父の顔は写真でしか知らないが、物心ついた頃に、亡母や親戚から話は聞いていた。あれから40数年、平成10年の秋、日本遺族会によるマーシャル・ギルバード諸島慰霊友好親善訪問に参加、感動と感激のひとつきを過ごした。南太平洋の美しいサンゴが散在する孤島。透き通るような海に真っ白い砂浜に着陸寸前、窓越しに見た時、こんな美しい島々で、なぜ戦争をしなければならなかったのか、悔しくてしょうがなかった。人間が招いた戦争という不幸な出来事を乗り越えて、真の平和の尊さを次の世代に伝えていきたいと思った。

平成18年12月、また父に会いたくて日本政府派遣マーシャル諸島慰霊巡拝に参加させてもらった。厚生労働省・援護局



「巨理いちごっこ」前での筆者

担当者支援による慰霊巡拝では、「お父さん、また会いたくて来ました。8年ぶりですね。今、お父さんの書かれた手帳と日記を東北大学院教授の仁平義明様に刊行してもらっています。完成したら再び会いに行きますので楽しみに待っていて下さい」と報告し合掌しました。

今回は運よくウオツゼ島の学校に海外青年協力隊として勤務する、広島県の石垣先生、三重県の女性飛垣内先生にお会い出来、ウオツゼの62の環礁島が克明に記された地図が送られて来た。嬉しかった。父のエニマ島、戦友の原田さんのアグメジ島と距離まで検証出来感激・感動だった。

少し少し父に寄り添うことが出来た。

不思議なめぐり合い

マーシャルの二人の留学生と会う

平成19年10月、宮城教育大学国際理解教員研修センターでマーシャルの32歳の男性、カールテインさんと通訳を伴って会話した。驚きと嬉しさの空間でした。その日に宮城クリネックススタジアムで楽天の野球を観戦した。マーシャルではベースボールと言わなくても野球で通用するそうです。

平成20年1月2日、仙台の留学生会館に彼を迎えに行き、宮城県護国神社で父の遺影の前で写真を撮り、巨理の墓前では父の戦地のマーシャル人の方だと報告しました。自宅では日本の食文化を楽しんでもらった。特に鯨の刺身には驚いて、ホエイル、ホエイルと言って写真を撮っていました。

平成20年7月、二人目の留学生の女性、ユリーンさんのご主人と2歳の女の子と雪が見たい言うので宮城蔵王に行った。お釜の傍の雪を見てびっくりしていました。

た。その帰り、仙台市八木山動物園とベニランド（遊園地）を楽しみました。

同10月「2008国際交流まつりinわたり」に世界17カ国のブースに参加し、ユリーンさんにマーシャル諸島共和国を紹介させてもらった。

2004年3月、初版発行「きょうも えんまん」著者、多田智恵子先生。発行所、健夕館。先生は巨理小学校在籍中、2001年7月より2年間、青年海外協力隊へ現職参加。60数年前の核実験で島を追われたビキニの人々が暮らすキリ島のキリ小学校でユリーンさんとお会ったそうです。日本でのお別れ会、会食では先生も参加してくれた。近い時期に必ずマーシャルに行き、皆さんに会うことを約束した。

東日本大震災とボランティア

震災時の3月11日、私は巨理町にある精神障害者の施設利用者の方々と地元の旅館で交流会を持っていた。その時、ガタガタ、バリバリという大爆音が響き渡ったとっさに倒壊すると思った。頭が真

っ白になった時、マイクを持っていた進行係の方の「皆さん落ち着いて、落ち着いて。テーブルの下に入って下さい」という指示で利用者の皆さんは誰一人乱れることなく冷静な行動を取って施設に戻った。しかし、その後利用者の一人の男性は帰宅を指示されたと誤解し、自転車で海に近い自宅に向う途中津波に巻き込まれて水死した。

漁業を営んでいる別の女性の父母と叔父も津波にさらわれた。現在三姉妹は借り上げアパートで生活している。

男性の方は妻と子供二人を家ごと流されて亡くなった。

もう一人の男性の父親は寝たつきりの妻を自転車に乗せて逃げる途中に津波に呑み込まれた。

施設での朝のミーティングでは、夢を見たので線香を上げ、礼拝しましたなどと話された時は、心の傷が深く辛い思いで過ごしている方々のことを想像すると心がひしがれる。

第2の人生を試すため、地元社会福祉協議会で知的障害者、精神障害者、身体障害者、視覚障害者、独居老人、日本に

嫁いだ外国人の日本語教室の送迎ボランティアなどの活動を実践して17年が経った。今回の地震による津波の被害の片付けに日本各地から若い男女が支援に駆けつけてくれた。福祉ボランティアと比較して災害ボランティアの労働力の量、質的内容には月とすっぽんの差を感じた。

今、被災地の方々が味わっている辛い思いや苦労は想像を超えるものであり、被災者の方々が本当に望む重労働のボランティアが出来なくてモヤモヤしていた時、「カフェ・レストラン・亘理いちごっこ」のボランティアに参加させてもらった。インターネットで「亘理いちごっこ」で検索出来ます。

内容は、罹災証明をお持ちの方には無償で食事を提供、また、寺子屋いちごっこ、カルチャーセンターいちごっこ、お話聞き隊いちごっこ、仮設住宅・集会所の見回り、イベント等人とのつながりを大切に活動しています。

災害ボランティアで一番難しかったことは、仮設住宅を訪問し、話し手の話した内容の大切な言葉をタイピングを持って一言繰り返し返して上げること。聞き返し、

復唱の傾聴のテクニクであった。災害にあった人もそうでない人も心をひとつに地域の皆さんが集えることは、被災者に大きな勇気と力が与えられることだと思ふ。今回、災害被災者・福祉ボランティアを通じて多くの方々から、こころの健康、からだの健康を戴いたことが大きな財産になったように思う。

返信

浜木綿の花

服部くにゑ (静岡県)

書問志津子様へ

「本部だより」25号届きました。黒川会長様、役員の皆様には何時も心から感謝申し上げます。

今回はまた特に書問様から浜木綿のお便りを読み、本当に嬉しくございました。お写真の浜木綿の花を眺めよくぞ咲いてくれたと感無量です。

浮田元会長様が昭和48年11月にクエゼリン、ルオット日本人墓地に緑の葉を繁らせていた浜木綿を徳原様から戴き、持ち帰って増やした球根を52年の1月に希

望者に分けて下さいました。

私も戴いて大事に大事に育て、今以て春になると花を咲かせてくれます。花が咲くと浮田さま、奥様を、そしてマーシャルの現地慰霊の旅を思い出します。厳しい寒さもこれからでございます。2月6日の命日も近くなりました。どうぞくれぐれも御身ご自愛下さいますようお願い申し上げます

私も92歳になりました。3月31日の慰霊祭にお参りに行けないのが残念です。ご盛会をお祈り致します。

1月23日

父を想う、沖縄を思う

宮城 勇
(沖縄県)



携帯サイト



<http://mibfa1926.com>

ホームページ運動企画

太平洋戦争の勃発で、戦火を避けて熊本に疎開した幼児も、父の人生の2・5倍超を生き今年70歳を数えた。叶わぬ夢

であるが、思春期に、青年期に、父保吉(ほきち)と会話を楽しみ議論を重ねてみたかった。二人で力いっぱい作業をして同じ汗を流してみたかった。そして時には酒を酌み交わしつつ、父の人生観など静かに聞いてみたかった。無念にも異国の地で倒れた父もまた、同じ思いではなかったか。

去る3月31日、父の御霊が眠る靖国神社の慰霊祭に初めて参列し、亡き父を想い、戦後67年を迎えた沖縄の今を振り返ってみた。

私の父は支那事変に応召、復員して間もなく勃発した太平洋戦争に職業軍人として参戦、マーシャル方面クエゼリン島にて戦死した。「長男(筆者)が生まれながら大安心」。お国のためにもうひと働き、と勇躍出征していったという。

当時2歳未満の息子にとつて、父の声や表情など何一つ記憶に留まるものはない。軍服に身を包み、両手で軍力を携えて立っている一枚の写真だけが、唯一父を知る手がかりとなっている。

戦況がいよいよ厳しくなり、私達家族は熊本県に疎開した。母幸子(当時28歳)、

長女トミ(11歳)、次女初子(7歳)、長男勇(3歳)の4人家族である。父は既に出征して留守、同居していた祖母からは疎開を固辞され、結局母子だけの疎開となったのである。後で知ったことであるが、その時父は、一年半も前に既に亡くなっていた。

疎開先は八代郡龍峯村字興善寺にある光厳寺であった。現在の興善寺町光厳寺である。8家族、総勢30人位がお世話になっていたと母は言っている。戦時中の極限状態の中で、どの家族も着の身着のまま、不安と強い虚脱感を抱きながらの逃避行であった。そのような家族を光厳寺と町民は温かく迎えてくれた。

終戦を迎え疎開先から引揚げ、焦土と化した故郷浦添でのテント生活を始めて暫く経った頃、一通の封書が届いた。父の死亡通知だった。「宮城保吉昭和19年2月6日時刻不詳内南洋方面で戦死第二復員局人事部長川井厳報告昭和22年6月25日受付」。この文章を書くため戸籍謄本で確認した父の死亡を知らせる内容の全文である。27歳1月の人生であった。

(全文はHPへ)

想い出写真館

(一枚の写真)

会員 吉田正明(続柄・子)
 戦没者名 吉田壹二
 戦没地・没年月日 クエゼリン島
 (19/2/6)
 所属部隊 海上機動第一旅団第二大
 隊(駆・3132部隊)



吉田家の家族写真 クエゼリン島に出発 15 日前(満州・扎欄屯の官舎前にて)

■写真説明 昭和18年11月21日撮影。戦没した父壹二(39歳)、母綾(33歳)、4月に満州の扎欄屯小学校に入学した私と妹恭子(5歳)の4人です。戦地に赴いた父の最後の家族写真となりました。父が残した5冊の写真集(昭和6年〜18年の間)。上海事変の記録からはじま

り、満州の満州里(マンチュリ)、昂々溪(コウコウケイ)、扎欄屯(ジャラントン)などの写真が、まとめられています。その最後の写真がこの写真でした。次に海上機動第一旅団第二大隊の略歴を記します。

●昭和18/11/16 軍令陸甲第六百六号により海上機動第一旅団の編成を下命

●昭和18/11/30 満州第三独立守備隊司令部(昂々溪)↓海上機動第一旅団本部

満州独立守備歩兵第十一大隊(昂々溪)

↓海上機動第一旅団第一大隊

満州独立守備歩兵第十五大隊(扎欄屯)

↓海上機動第一旅団第二大隊

満州独立守備歩兵第十六大隊(白城子)

↓海上機動第一旅団第三大隊等を基幹として編成を完結

●昭和18/12/7 海上機動第一旅団第二大隊は満州の扎欄屯を出発、釜山を経て12月26日トラック島に到着

●昭和18/12/30 トラック島を出港、19年1月4日にブラウン島に上陸

●昭和19/1/10 マーシャル諸島クエゼリン島に前進。そして第二大隊第四中隊をウオッセ、第六中隊をマロエラップ

に派遣

●昭和19/2/6 クエゼリン島の第二大隊主力玉砕

(参考資料：防衛庁防衛研修所戦史室著・戦史叢書・中部太平洋・陸軍作戦〈1〉マリアナ玉砕まで)

寄付者芳名

敬称略

岩手県 佐藤亮三 小杉サヨ 宮城県
安藤としえ 森フサエ 秋田県 打矢和子
山形県 丹野好啓 福島県 遠藤貞頭
鈴木ヨシエ 根本さとみ 茨城県 鈴木やよひ
神永栄子 大串直行 北条晃 栃木県
岡村勝利 菊池彦亘 猪瀬康夫 埼玉県
宇田川ひさ 小野博孝 富川艶子
片桐寛治 鈴木裕子 小田原利子
近藤マスエ 千田恒子 高林芳夫 千葉県
廣原実 腰川妙子 泉水堯恵 石井健蔵
相川孝夫 宮崎實 東京都 大給湛子
栗林徳五郎 石川勲 黒川誠 飯島裕宣
岩浪邦江 佃信一郎 高坂和靖 田中勲
毛塚通弘 井上賀雄 山田二美
内海静枝 晝間志津子 間々田征史
谷梯初江 番場信子 鈴木千春 星野綾子
中村順子 草場寛 西田寿子 浜

田つき子 山口裕子 神奈川県 石渡綾子
岡野智津子 石沢洋子 鈴木友季子 平井貢
新潟県 山田輝雄 石丸進 高橋梅子
富山県 池田淑子 広島富子 石川県
木村久子 山梨県 黒川正文 長野県
滝澤弘一 山口久幸 岐阜県 堀井洋平
吉田正明 静岡県 服部くにゑ 大畑幸夫
野崎昭二 愛知県 大見シノブ
安藤昌子 浜田芳枝 京都府 川本玲子
奈良県 奥田義弘 和歌山県 福井敬眞
鳥取県 井上輝美 広島県 藤木正
佐々木千鶴子 浦手清司 瀬戸隆子
奥井禮子 山口県 吉永峯生 香川県
石川正興 富田佳代子 愛媛県 三好エミ子
長岡俊夫 山村一郎 馬場清 渡部守
大塚喜久雄 高知県 柳村摩耶子
山本忠 野島鶴美 福岡県 平田郁子
吉松貞子 佐賀県 金子茂 長崎県
山下夕エ 熊本県 土田利子 植川二男
沖縄県 山川初子(旧姓宮城・勇氏の姉) 宮城勇 会友 兵頭義彦 山口正雄

訃報

●山下みつさん(埼玉県草加市)は、平

成24年4月29日に逝去されました。享年99歳。謹んでご冥福をお祈り致します。今後は山下政治さん(長男)が継承。

■表紙の言葉

写真は千鳥ヶ淵戦没者墓苑のシンボルである陶棺です。これは日本古代豪族の寝棺を模した陶製の棺で、蓋のみで2トントンという世界に例のない大きさです。製作は岡山県備前市の九州耐火煉瓦株式会社。素材は先の大戦の各戦域の大地の土、石を高温で焼き、粉にして練り込み、千七百度の高温で焼いたものです。長さ2.5m、幅1m、高さ1.3m、重量5トンです。写真背面のパネルは墓苑の工事中のために貼られているもので、折角の美しい緑が失われています。

5月28日の拜礼式に出席して撮影しました。拜礼式は毎年厚生労働大臣が替わり、もちろん総理大臣もここ数年同じ顔を見たことはありません。

式には、常陸宮ご夫妻がご出席。身元の不明の戦没者千二百二十八名の遺骨が加わり、総計三十五万六千六百三十二人となりました。(H・K)

第50回マージナル方面遺族会慰霊祭

平成24年3月31日

於 靖国神社



撮影 ツカモト写真館 (靖国神社・九段会館指定)